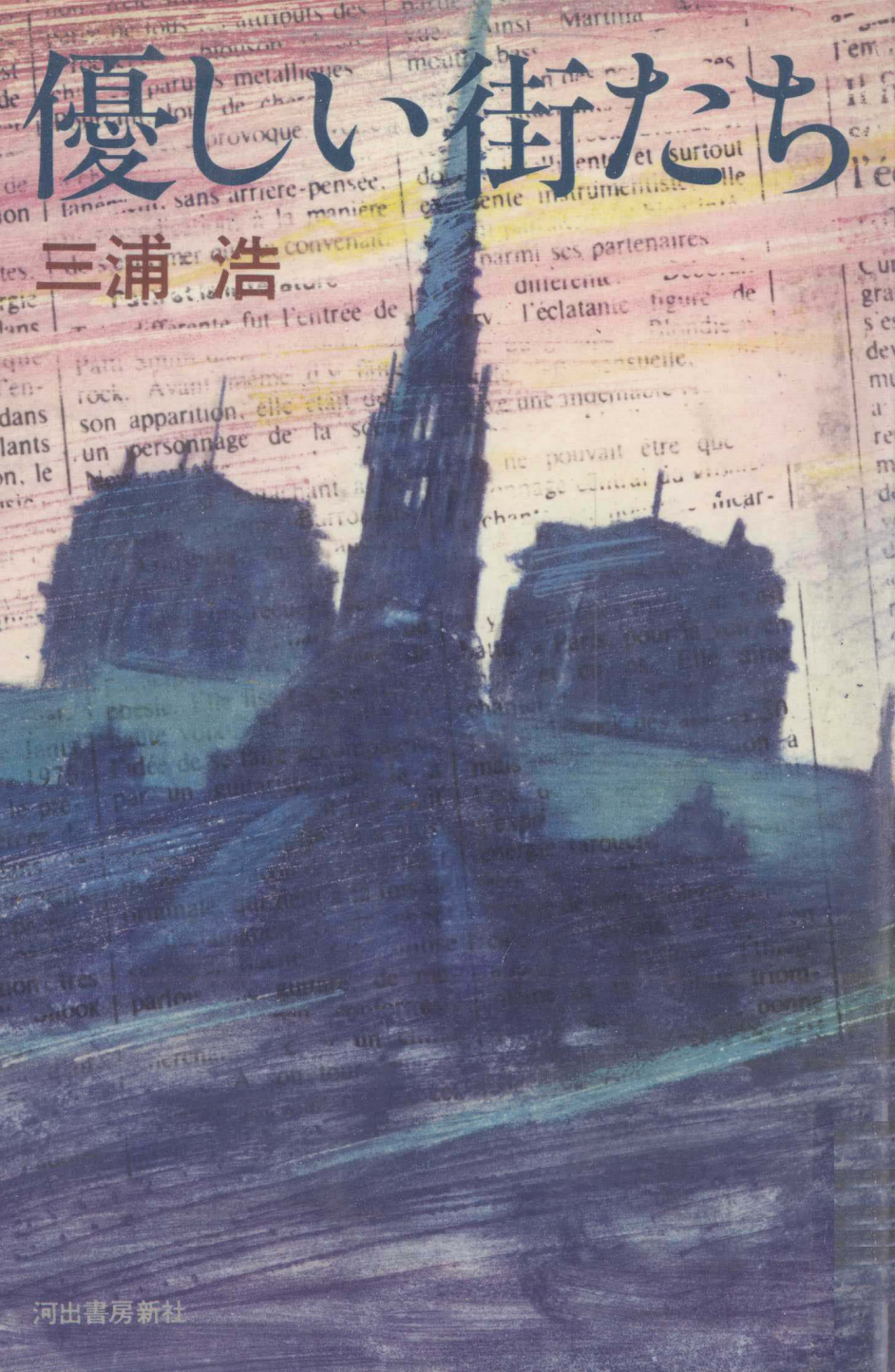


優しい街たち

三浦 浩



優
し
い
街
た
ち
三
浦
浩

優しい街たち

昭和五十四年九月二十日 初版印刷
昭和五十四年九月二十八日 初版発行

著 者 三 浦 浩

装幀者 竹 内 宏 一

発行者 清 水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社・東京都新宿区住吉町九五

電話東京(〇三)三三三三—五三一(営業)
(〇三)三三三三—五三二(編集)

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 小高製本工業株式会社

©1979

定価はカバー・帯にあります

優しい街たち

A 章 I

送りの車を断わって、テレビ局を出ると、深夜の街は湿っていた。

風が吹いている。その風のなかに、きわめて細かい水滴が含まれていて、それで、レインコートの表面がしっとりと濡れていった。その雨や空気の肌合いを、いかにも東洋オリエントの町のものだと思ひ、瀬木徹は、自分の国の首都の街路を、エトランジュのような気分で、歩いていた。瀬木は快く疲れ、一種の幸福感のなかにいた。

突然、真赤なものが、目の前にかぶさるように現われ、止まると、それは、真紅のスポーツカーだった。

胸が自分でもわかるほどドキドキし、瀬木は、真赤な怪物が彼にかぶさるよう出現して、間一髪で急停車し、そいつがスポーツカーだとわかるまでの約三十秒間、文字どおり、茫然と道の真中に立っていた。

「馬鹿野郎！」

瀬木は、怒鳴られた。

「道の真中を、夜、のそのそ歩く奴があるかい。もうちょっとで、お前っちを、ひくところだったじゃあねえか」

瀬木は、運転している男を見た。長髪で、四角くて大きいサングラスをかけ、黄色いアスコットタイが、細いくびに巻きつけてある。瀬木は、しかし、奇妙に、怒る気にはなれなかった。そう、ここは、歩道というものが極度にすくなく、しかも、車ばかりが無闇と多い、日本だったな、とそんな気分だったのである。彼は、道の端により、黙って、そのまま歩き出そうとした。

そのとき、真赤なスポーツカーから、真白なものが、むくむくと起きあがり、飛び出すと、瀬木の左腕にぶらさがった。いや、ぶらさがった、というより、瀬木の肩に、もたれかかった。長身の彼によりそった女性の髪は、ちょうど、彼の肩にふれた。

VOL^{ヴォル} DE^ド NUIT^{ヌイト}の香りがして、瀬木は、ふと、わずか一週間前に発った、パリのオルリー空港と、彼を見送りにきていた、妻でない女のことを想った。そのひとも、このパフェームをつけていた……

だが、いま、瀬木の肩にもたれて、どうやらそのまま歩き出した女性は、パリの女よりずっと、若かった。酔っていたためか、彼は自然にその少女の腰に軽く左手を添えていた。

少女に捨てられたスポーツカーは、唸り声をあげて二十メートルほどバックすると、また、瀬木

たち二人に向つてきて、わざとのように急停車し、左のドアを乱暴に開け二人の進路を塞いだ。

「サーちゃん」

男は、少女にそう呼びかけた。

「この、おじさん、ユーの知り合いか」

少女は首を横に振った。

「いったい、なに考えてんだ。これから、軽井沢へ行くはずだったじゃあないか」

「やめたわ。キミひとりでいらつしやい」

少女は、そう答えると、道を塞いでいたドアを、ボタンと勢いよく閉め、いつそう、瀬木に身体を預けたまま、歩き出そうとした。

男は、こんどはいやに、そーっとドアを開け、足から、そろっと、外へ降りた。長い足だな、と瀬木は思った。男は、長身の彼と比べても、見劣りしない背丈だった。サングラスを右手でゆつくりと、とると、若い顔が、街灯の下に現われた。だが、目がいけない。瞳はどんよりと濁っていた。その濁った目で瀬木の頭から足までを、値ぶみするように嘗めまわしたとみるまに、猛烈な左フックを飛ばした。瀬木は、避けなかった。ガクンと、右の耳下腺が鳴り、しかし、次の瞬間、彼は、むしろ、のろい動作で、右手を水平に、左から右へ、斬った。

男は、二メートルほど右へ飛んで、スポーツカーの、シートに倒れ込んで、動かなかった。

気がつくと、街灯の柱に手を当てて、いままで横にいた少女が、吐いていた。酒や、ふつうの

食物でない匂いが強くした。瀬木はそんな少女の背中を、ただ、見つめていた。吐き終ると、少女は、ハンカチーフをさがすようだった。バッグは、もっていない。瀬木は胸のポケットから、麻のそれを出すと、少女に渡した。唇をふき、眼に当てた。その瞳があどけない美しさとは、まるで不釣り合いなように暗かった。瀬木は、このとき、なにか、ほおっておけない気が、した。

スポーツカーのなかで、瀬木に打ち倒された男が、気がついたのか、もそもそと動いた。瀬木は、男を無視して、シートにあったバッグを取り上げると、少女に渡し、左手を出した。少女は、当然のように、その手をとると、赤坂の坂道を上がっていった。

II

瀬木は、P新聞のパリ特派員である。パリに赴任して、もう十年になる。そのため、新聞社は、彼に、最近の本国事情を学ばすため、三カ月間の、東京勤務を命じた。だから、彼は東京駐在のパリ特派員とでもいう、不思議な資格で、新聞社の外報部で、遊軍的な仕事をここ一週間ほどつづけていた。本来なら、フランス語に堪能な若い記者が他にいないわけではないから、瀬木は、とくに本社に呼び返されていいはずだった。しかし、折よく、四年前の交替期に、彼の大学以来の友人である伊東が異例の出世で、編集局長になったため、瀬木はパリのポストを守ることでできたのである。伊東は、もちろん、はじめは瀬木を外報部長にしたかったのだが、瀬木が海外で暮すことに異常に執着しているのを更めて知って、わがままを許してくれている。もっと

も、瀬木はなにも外国がそんなに好きだったのではない。日本にいたことが、堪えられない過去があったのだ。初老になったいまは、それも、もうどうでもいいことになったような心境だったが、十年ぶりに東京に住んで、瀬木は、パリにいるのとは別な疲労感をもっていた。

山王神社から、瀬木が帰国以来泊っているホテルへの道に、他に歩いている者はなかった。相変わらず風がしっかりと吹いて、ふと横を見ると、もたれている少女の黒い髪に小さな露ができてゐる。坂の上から吹いてくる風には、なにか、海の匂いともいったものがまじっているのを瀬木は感じた。パリの風には、このような匂いは、ない。

「おじさまって、どうして、そんなに黙っているの」

唐突といていい感じで、少女が、下から瀬木を見上げていった。

「それに、お強いよね。お年の割りに」

そういわれて、はじめて瀬木は、テレビ局を出て以来、自分がひとことも声を出していないと知った。自分では、多くのことを語ったと思っていたのは、頭の中で、フランス語と日本語で、自分なりのモノローグをばげしく交わしていたからであらう。

「寡黙な、お方なのね」

少女はつづけた。

「NON」

と瀬木は答え、自分が、そのようなことばで返事したのも気付かずに、左手に、力をこめた。

「ほくは、^{おし}嘔じゃあない。なんだか、ずっと自問自答していたんだな。それに……」

次のことばを彼はのみこんでいた。——キミガスキダ——と、パリでなら、つづけたであらう。

「それに、なあに」

「うん。ところで、あんたは、どうする。気分は直った」

「ええ。ただ」

「ただ、なんだい」

「ご免なさいね」

そのセンチテンスは、帰ってから、瀬木が若い女性からしばしば聞いたものである。

「ご免なさいね。とっても眠いの」

そういうと、彼女は瀬木の胸に身体を預けた。^{グロム・ド・ニュイ}夜間飛行がまた匂った。

「ぼくは、そのKホテルに泊っている。よければそこで、憩んでもらってもいいが」

このとき、瀬木の心に、男の野心がなかったわけではない。一見、紳士風なことばをつかい、騎士的にふるまいながら、瀬木は、この美少女との思いがけない邂逅^{かいこう}に、ある意味では、たかぶりさえ覚えていたのである。

「すぐ、そこだ」

瀬木は、バッグをとると、左手で少女を引きずるようにした。

ロビーには人影はなく、フロントが、やけに明るい、と瀬木は思った。キーを受け取り瀬木は、フロント係の視線から少女をかばいながら、エレベーターに乗った。

瀬木の部屋は、シングルだが、どうしたわけか、使っていないベッドが、窓ぎわに一つある。瀬木は十階のエレベーターを降りてから、少女をまるで花嫁のように抱きかかえてきたのだが、自分の、つくってあるベッドのシーツをはいでそこへ、そーっと置き、自分は、もう一つのベッドに腰かけた。

少女は、もう軽い寝息を立てていた。瀬木は、枕もとのスタンドをつけた。明るい光のもとで、少女の顔は、おどろくほど繊細な美しさを見せていた。瀬木は、白人びいきではなかったが、その美しさは、たとえば、フランスの地方都市や、あるいは、ハンガリーの首都でのオペラの幕間の廊下などで、ふと見かける美しさに似ていた。瀬木は、少女の寝息を吸ってみた。やはり、さきほど、彼女が吐いたときに匂った匂いがあった。瀬木は、少女のパンプスを取り、ストッキングもとると、胸のボタンをはずし、シーツをかけ、スタンドを消した。

乱暴に、レインコートを脱ぎすてると、瀬木は、シャワーを浴びようと思った。冷たいシャワーを浴び、そして、ウイスキーを飲むことにした。——ブランドーはやめておこう——と自分について、瀬木はルームサービスに、スコッチを一瓶たのんだ。

タンブラーに、半分ほど注ぐと、瀬木はその液体を一気に飲みほし、さらに、冷たい水で割って、飲んだ。酔いが、テレビ局で「監禁」されていたための神経的な疲労感と、そのあと、まさ

に思いがけず起こったアクシデントの疲れを、徐々に彼の体から、とっていった。

それにしても、美しい娘だ、と、瀬木はグラスを左手に弄びながら、彼自身のベッドにのびのびと身を横たえている女を眺めて、そう呟いていた。パ・ベル・メ・ジョリ（美しく可愛い可愛い）、という言葉があるが、このこは、ベル・エ・ジョリ（美しく可愛い）だと、そう思った。どうして、こんな美しい女が、こんな具合に、おれのところに來たのか、あの、赤いスポーツカーを運転していた若い男の怒りが、ふと、わかる氣もした。

瀬木は、グラスを置いて、シャツをとり、娘の頬を両手に挟んだ。そして、やはり、あの匂いを嗅いだ。娘は、たしかに、なんらかのヤクを飲んでた。そのために、この無分別ともいえる行動をしているのにちがいがなかった。瀬木の胸に一瞬、ためらいが起こり、それと同時に、枕もとにセッソしておいた時計が、小さな音を立てた。先ほど撮ったビデオの放映の時間だった。瀬木は、ベッドから離れると、テレビのスイッチを入れた。

世相座談会というそのプログラムは、その名のとおり、最近の世相を話題に、各種の事象を取りあげるもので、たまたま、パリから帰ってきた古い外報部の記者である瀬木をサカナに、東京やパリの、現代の学生氣質を、わけ知りの男女が質問する形に、今夜の番組は構成されていた。強いライトに照らされてドーランを塗ったいくぶん褐色の、キザといえはいえる男が中央にいて、ときにフランス語を交えてしゃべっていたが、それが瀬木徹自身なのである。

やれやれと、瀬木は、関連会社のテレビ局ということもあつてか、わずかな出演料で、これは

どの道化役をやらされている自分に、堪え難く不機嫌になっていった。しかも、自分が語っているのは、現代のフランスの若者の性のモラルについてであり、それに、日本の評論家が、バリケードのなかのセックスについて補足し、瀬木は、自分でもおどろくほど、ビュリータンの発言をしているのだった。

瀬木は、スイッチを押して、テレビを切った。シャツを着て、もう一杯、ウイスキーを飲むと、瀬木は、新聞社に電話した。編集局長の伊東は、まだ局長席にいた。

「おい、いま、君の出ている世相なんとかを見ているんだ。なかなか、男前に写っているじゃあないか。出演料は、たんまり貰ったかい」

「ああ、まあね」

「いやに、気のない返事だが、どこにいるんだ」

「う、おれのホテルさ」

「ちょっと、寄ってみようか。やっと、落着いたところなんだ」

「いや」

瀬木は、少女の寝姿を、ふり返ってみて、あわてた。

「なんだ。誰かいるのか。おい」

「いや」

「さっきから、いやばかりとは、へんな奴だな。まあいいや、そっちが具合が悪いんなら、

こっちへ来ないか。考えてみると、君の帰国祝いをまだやっていない」

瀬木は時計を見た。十二時四十五分だった。新聞社の編集局は、まだ「宵の口」ではあるが、局長である伊東は、そろそろ、疲れているのであろう。

「すぐ行く」

瀬木は、フロントに電話して、ハイヤーを頼み、ライティング・デスクのメモ用紙に、

「目が覚めたら、そのまま、出て行って下さい。部屋の錠は自動ロックだから、ご心配なく。小生はしばらく、ここにいますはずだからもし気が向けば、一度、電話を乞う」と、それだけを記して、ビローにはさんだ。

そして、少女のバッグを開け、先ほど、彼女に貸したハンカチーフを取り出すと、それをそのままタオルにくるんで、レインコートのポケットに入れた。社会部育ちの伊東なら、このヤクが、なんであるかを、教えてくれると思ったからだ。バッグを開けたとき、もちろん、瀬木は、別のものも調べて、少女の身許を知りたいと思ったのは事実である。しかし、彼は、あえて、そうしなかった。

エレベーターで地下に降り、そこに待っていたハイヤーに乗って、新聞社へと命じたとき、瀬木は、自分が、とんでもないものを、置き忘れてきた、という感情に見舞われた。四十八歳の自分に、もう二度とはないような、そうしたチャンスを、自分から捨ててしまったような、そんな感慨なのである。

だが、やはり、瀬木は、そのまま車を出させた。雨はかなりはげしくなつて、ネオンサインがフロントグラスにかすんでいる。たぶん、伊東たち、昔の飲み仲間が、昔のような書生っぽい飲み方で歓迎するはずの夜の町へ、彼は向かいながら、あのとき、テレビのスイッチを入れなかったら、おれは、あの少女を抱いていたろうかと、自問していた。

B 章

夜の編集局には、明るさと暗さ、そして、男たちの孤独感と連帯感の奇妙なカクテルが渦巻いている。局長である伊東五郎は、おそらくその孤独感と連帯感の頂点というか、環の位置に在るのだろう。いや、もう数時間に亘って、彼だけの判断で、彼だけの責任で、おどろくほどの要件を次々に決定していったあと、伊東はむしろ深い孤独感にとらわれていたのかもしれない。

そのとき、のっし、のっしとでもいうような歩幅で、編集局に入ってくる瀬木の姿が目にとまった。

「瀬木の奴、やはり背が高いな」と、伊東はそんな目で昔のクラスメートを見ていると、疲れもあつてか、ふと瀬木にコンプレックスを覚え、すこし、意地悪な気分になっていた。

瀬木は長身の身体を折るようにして、どしりと、局長席の横のソファに沈んだ。伊東もデスクから立ったとき、外報部の泊りの副部長の今井が、テレックスをひきちぎって、彼の所へ駈ける